

④はS事件でも成就した。

⑤はS事件でも成就した。

⑥は、S事件にはあてはまらない。聖霊の来臨は、第二位格がベツレヘムで生まれたように、エルサレムで起こらねばならなかった。この点でJ事件とS事件には本質的な相違があるようである。

⑦は、サマリヤの町で成就したと考えることができる。八章二五節に「このようにして、使徒たちはおごそかにあかしをし、また主のことばを語って後、エルサレムへの帰途につき、サマリヤ人の多くの村でも福音を宣べ伝えた。」とあるからである。

結論として、S事件では、⑥を除いて①～⑦の全部が成就していることになる。ただしJ事件と同じように、②と⑦だけは部分的な成就であることを指摘しておく。

(三) C事件

使徒一〇・一～四八に、J事件と類似したカイザリヤで起こった事件が記されている。コルネリオというイタリヤ隊の百人隊長は異邦人ではあったが、ユダヤ教の神を熱心に礼拝していた者であった。彼は、割礼を受けていなかったと思われる¹⁰⁾。ペテロを通して、彼と彼の家族、親族、友人たちにJ事件と同じように異言現象の伴う事件が

起こるのである。このC事件は次のように要約できる。

- Ca コルネリオと共に集まっていた人達はペテロが語る福音のことばに耳を傾けていた(四四節)
- Cb 耳を傾けていたすべての人々に聖霊が下った(四四節)
- Cc 彼らは異言を話し、神を賛美した(四六節)
- Cd 彼らはイエス・キリストの御名によってバプテスマを受けた(四八節)

これらの異邦人は、キリストの福音に接したことのない人々であった。ペテロのメッセージに耳を傾けていた人達は、信仰を持つようになった。そのとき、彼らは聖霊を受け、異言で神を賛美するようになったのである。聖霊の来臨預言の要約①～⑦のポイントは、C事件ではどのように成就しているのであろうか。

C事件の当事者であるペテロが、この事件について説明している場面が使徒の働き一章に出てくる。その中で特に一一・一五～一八において、ペテロはJ事件と同じ聖霊のバプテスマが起こったことを明らかに証言している(二五～二七節)。そしてペテロの弁明を聞いたエルサレム教会の兄弟達は、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。」(一八節)と認めている。これらの事実から、ポイント①、③、④、⑤はここでJ事件、S事件と同じように成就した。ポイント②は、ここでは、コルネリオの関係者である多分数十人全員に成就した。ポイント⑥は、S事件と同じく、ここではあてはまらない。ポイント⑦は、地の果てにまでキリストの福音が及ぶために、初めて異邦人に聖霊が下ったことに注目する必要がある。エルサレムの教会が異邦人への伝道の門が開かれていることをこの事件で認めてから(一一・一八)、ルカは異邦人宣教が急速に進んで行ったこと

を記録している(一一・二〇―二六)。

結論として、C事件では、⑥を除いて、①―⑦の全部が成就していることになる。ただし、J事件、S事件と同じように②と⑦だけは、部分的な成就であった。

(四) E事件

使徒の働きの中に記録されているJ事件と類似している最後の事件はエペソで起こった。使徒一九・一―七に記されている。J事件はAD三〇年頃起こったが、エペソ(E)での事件は、パウロの第三次伝道旅行中のAD五五―五六年頃に起こった。J事件が起こってから四分の一世紀が経っていた。E事件の一つの特長は、パウロが関わっているという点である。J、S、Cの事件では、いつもペテロが中心人物として関わっているのは対照的である。E事件は次のように要約できる。

みなで二三人ほどのヨハネのバプテスマを受け、聖霊のバプテスマを知らないキリストの弟子¹¹⁸達は、

Ea パウロからヨハネの悔い改めのバプテスマとは違うキリストの聖霊のバプテスマの説明を聞いた(四―五節)

Eb イエスの御名によってバプテスマを受けた(五節)

Ec パウロが彼らの上に手を置いた(六節)

Ed 聖霊が彼らに臨んだ(六節)

Ee 彼らは異言を語ったり、預言をしたりした(六節)

このE事件は、事象の順序といい、聖霊を受ける契機が按手であることといい、S事件と良く似ている。聖霊の来臨預言の要約である①―⑦のポイントは、E事件ではどのように成就しているであろうか、それを検討してみたい。

まず第一に、S事件、C事件と同じくE事件でも、ポイント①、③、④、⑤はJ事件と同じように成就したと考えられる。ポイント②は、E事件では、ここに登場している二人だけに限られ、彼らに成就した。ポイント⑥は、S事件、C事件と同じく、E事件でも当てはまらない。ポイント⑦に関しては、多分ユダヤ人にはあるけれども、ヨハネのバプテスマのことしか知らない、イエスによる聖霊のバプテスマには無知であった者達に聖霊が臨んだことに注目をする必要がある。ルカはこれ以後、バプテスマのヨハネに関する記述は一つもしなくなる。それまでは、まずルカの福音書において、一・五―八〇、三・一―二二、七・一八―三六、九・七―一〇、一八―二〇、一六・一六、二〇・三―一六にあるように、バプテスマのヨハネの誕生から死に至るまで彼の生涯について、また彼とイエス・キリストとの関わりについて詳しく報じている。使徒の働きの中においても、ルカは、一・五、一〇・三七、一一・一六、一三・二四―二五、一八・二五、そして最後に一九・三でバプテスマのヨハネのことに言及して、彼がイエス・キリストの働きの先導役としてどんなに大きな役割を果たしてきたかを明らかにしている。ルカのバプテスマのヨハネへの言及が無くなるということは、ある意味において、キリストの福音が完全に、ユダヤ人とユダヤ文化圏から異邦人世界に移ったことが意味されていると考えられる。こういう意味において、E事件は、ポイン

ト⑦の明確な成就であったと言える。即ち、キリストの証人として、福音が地の果てにまで宣べ伝えられるために力を着せられる事件となったからである。このE事件後、福音はエペソを中心とした地域で大きく前進することになる。使徒一九・一〇に「これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことはを聞いた。」と記されているからである。

結論として、E事件では、S、C事件と同じく⑥を除いて①―⑦の全部が成就していることになる。ただし、J、S、C事件と同じように②と⑦だけは、部分的な成就であった。しかしながら、⑦に関しては、J、S、C、Eの四つの事件で、エルサレムとユダヤ（ユダヤ人）、サマリヤの全土（サマリヤ人）、地の果て（異邦人）の主要な人種、文化領域で福音宣教が大前進するきっかけとなっているので、ほぼ全面的な成就を見たということが出来る。しかし、②に関しては、歴史の中で世界のあらゆる民族から神の定めた全ての信すべき者が起こされるまで完成する成就を見ることはない。

以上、使徒の働きの中に記されている聖霊来臨の預言の成就であるペンテコステの月に起こったJ事件、更にそれと類似の超自然的なしるしの伴ったS、C、Eのそれぞれの事件を検討してきた。結論として、これらの四つの事件に関していえる事は次の事である。

第一に、J事件の特異性である。聖霊の来臨はまずエルサレムで起こらねばならないとの預言の成就がJ事件（ペンテコステの事件）であり、S事件でもC事件でもE事件でもないということである。

第二に、聖霊来臨の預言のポイント⑦の成就是預言された順番通りにJ（エルサレムとユダヤ）、S（サマリヤ）、CとE（異邦人）になっており、これはまさしくルカの記した使徒の働きの構成順序と一致する。

第三に、ポイント②に関しては、J、S、C、Eいずれの事件も部分成就であり、その完成なる成就是、キリストの再臨を待たねばならないと考えられる。

これまでの考察で、聖霊の二重体験は支持されているのだろうか。答えは、否定的である。その根拠を明確にする前に、もう一つの検討が必要である。J、S、C、E事件で聖霊体験をした人々のことは論じたが、それ以外の状況で信仰を持った人々はどうのような聖霊体験をしたのであろうか。使徒の働き二章以下の各章の中で、そのような人々の事を考察してみる。

(五) その他の初代クリスチャン群

この紙面上で、帰納的に見い出される全ての人々のことを論じることができないので、特に取り上げるべき人々以外は要約的に述べさせていた。 (a) J事件からS事件までに信じた人々、 (b) S事件からC事件までに信じた人々、 (c) C事件からE事件までに信じた人々、 (d) E事件以後信じた人々の順序で検討していく。次の図を見ると、J、S、C、E各事件で関わった人々と、その他の信者との関係が明らかである。

図にある如く、これまで見た、J、S、C、E各事件に関わった人達は、全体でも数百人位だったと思われるので、J事件から、E事件の間に信仰を持った人々の中の極く一部分であった。初代教会を構成していた大多数のクリスチャンについて、以下検討していく。

(a) J 事件から S 事件までに信じた人々

二・三八―四一を見ると、ペテロの説教を聞いて、三千人ほどの弟子が加えられている。三八、三九節のペテロの勧めに応じて彼らは悔い改め、水のバプテスマを受けた。賜物としての聖霊を受けたと思われるが、しるしが伴ったという言葉及はない。四七節には更に多くの人々が救われたと記されている。

三章では足のきかない男のいやしが記されている。彼は多分、信仰を持った。このいやしが切っ掛けとなり、みことばを開き信じた男性が五千人ほどになった(四・四)。

これらのキリストを信じた者達は、J 事件の人々と同じように聖霊のバプテスマを受けたのだろうか。四・三一にこの問いに対する解答を読み取ることができる。

彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、

一同は聖霊に満たされ、みことばを大胆に語り出した

(四・三一)。

この「一同」の中に、J 事件で聖霊のバプテスマを受けた人々だけではなく、それ以後、信仰を持った人々も当然含まれていたと思われる。その一同が聖霊に満たされたのである。この事実は重い。この事実は、彼らは聖霊のバプテスマによって聖霊を受けていたことを意味するからである¹⁰⁾。

四、五章においても、バルナバ、アナニヤ、サッピラなどの信者名と共に、多くの人々が信じた(五・一四)ことが記されている。そして迫害者の前に立たせられた一二使徒達の次の証言は大切である。

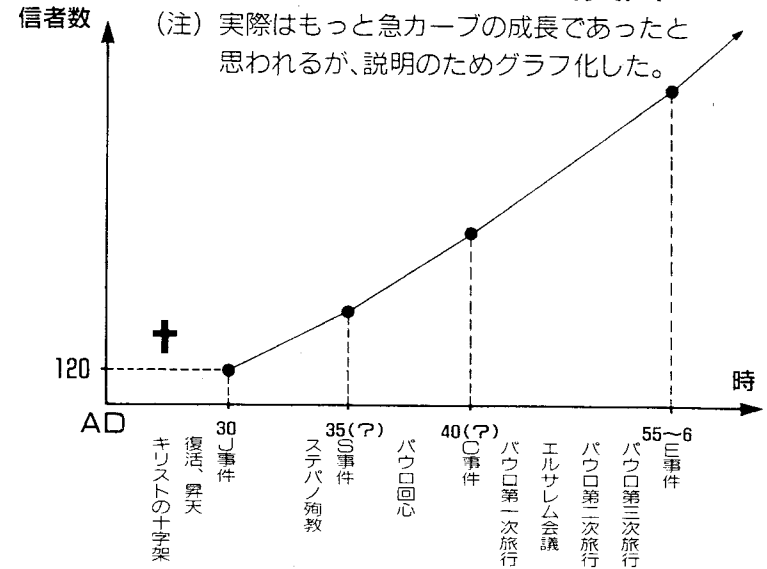
私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です(五・三一)。

使徒達は、ここで自分達が、イエス・キリストの十字架、復活、高挙(三〇、三一節)の証人であると主張し、自分達の内にいる聖霊も証人だと語っている。「ご自分に従う者たち」(Τοις Πειθαρκοῦντες αὐτοῖς)と使徒が語ったとき、彼らは決して自分達だけを限定的に指してこの用語を用いたとは考えられない。この時点までに、J 事件に関わった者達だけが聖霊のバプテスマと注ぎを受けていた人々であるとするならば、自分達と他とを区別する表現法を用いたと思われる。使徒達にはこのような区別が心の内になかったので、それまで信仰を持つようになった人々をも含めてこのことばを用いたと考えられる。

六章では、執事七名が立てられているが、彼らは「御霊と知恵とに満ちた」人々であったので、聖霊は当然受けていた。六・七によると、更に多くの救われる人々が起こされ、多くの祭司たちも信仰にはいったと記されている。これらの人々も、信じて聖霊を受けていると考えるべきである。

初代キリスト教会の成長図

(注) 実際はもっと急カーブの成長であったと思われるが、説明のためグラフ化した。



七章ではステパノの殉教が記されているが、彼の死後、エルサレム教会に対する大迫害が起こり、使徒達以外の人々は各地に散り、福音を語った。これによっても、多くのユダヤ人が入信したものと考えられる。

(b) S事件からC事件までに信じた人々

エルサレム教会の執事の一人ピリポが、同信の兄弟ステパノの殉教によって引き起こされた迫害によって散らされ、サマリヤの町で福音を語ったことによって、S事件が起こった。サマリヤ人にいのちに至る悔い改めの道が開かれたのである。

S事件の後、サマリヤ伝道が展開されていったことは、既に述べた(八・二五参照)。

八・二六―四〇に、エチオピア人の宦官に対するピリポの伝道が記されている。彼の信仰に基づいて、ピリポは彼に水のバプテスマを授けたが、彼が聖霊のバプテスマを受けたとは明言されていない。しかし、今までの議論から、ユダヤ教改宗者であったと思われるこの宦官は、多くの救われたユダヤ人と同じように信じて聖霊を受けたと考えられる。この聖霊のバプテスマに伴う外的なしるしは特になかったようである。

九・一―一九にサウロの入信が記されている。ダマスコへの途上、復活の主イエスに出会ったサウロは、盲目のままダマスコの町に入る。あらかじめ主イエスから幻によって互いのことを知らされていたサウロとアナニヤの両者は出会うことになる。その時アナニヤはサウロに語る。

兄弟サウロ。あなたが来る途中でお現れになった主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです(九・一七)。

「聖霊に満たされるため」とアナニヤが語っているところから、この時点までにサウロは信仰者にされていたと判断できる。即ち、主との対話の中で、信仰が与えられ、聖霊を受けていたのである。彼は、超自然的な出会いを主としたが、聖霊のバプテスマを受けたことによって、J事件の当事者のような異言を語ることもなかった。アナニヤとの出会いの後、彼はすぐ福音宣教の業を始めた(九・二〇)。多くの人々が信仰を持つように導かれたと考えられる。このようにして、キリスト教会は「ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った」(九・三一)。ここで「ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地」となっている点に、ルカの使徒の働きの著者としての構成意図を見る。J、S事件後、このようにまとめられているからである。

九・三一―四三にペテロのルダ、サロン、ヨッパでの伝道の展開が記されている。ここでも多くのユダヤ人が入信した(二五、四二節)。これらの入信者は、明言されていないけれども聖霊を受けたと考えられる。このペテロのヨッパ伝道が、異邦人伝道への門が開かれるきっかけとなり、C事件へとつながっていく。

(c) C事件からE事件までに信じた人々

一〇章全体は、C事件が説明されている。J、S事件と同じく、ここでも特異なしるし(異言)の伴う聖霊のバプテスマが起こった。C事件における神の意図は、一一・一一―一八で記されているごとく、ペテロの目撃したしるしの伴う異邦人の聖霊のバプテスマ体験の説明を聞くことによって、エルサレム教会とユダヤ人信徒が異邦人も悔い改めて救われる道が開かれていることを認めるようになることであった(一八節)。

このC事件後、アンテオケでのギリシヤ人伝道が展開され多くの人々が救われていった(一一・二二)。このアン

テオケ教会の成長が、バルナバ、サウロという人材を必要とするようになり、彼らの働きによって教会は更に前進し、信者たちは「キリスト者」(二一・二六)と呼ばれるようになった。

一二章は、エルサレム教会に対するヘロデの迫害、使徒ヤコブの殉教、ヘロデの死の事件が記されているが、そのような中であっても宣教の実が豊かにユダヤ人の間で結ばれていた(二二・二四)。

C事件が異邦人への福音宣教の道を大きく開き、アンテオケ教会の成長をもたらし、それが、異邦人世界へのバルナバとパウロの大伝道旅行(二三章)につながる。彼らの働きで多くの異邦人がキプロスで、ピシディアのアンテオケで信仰を持った。ルカは彼らの様子を次のように描く。

弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた(二三・五二)。

「聖霊に満たされていた」彼らは、明らかに聖霊のバプテスマを受けていた。しかし、ルカは、彼らが外的なしるしの伴う聖霊の受け方をしたような書きぶりをどこにもしていない。事実、一九章のE事件に至るまで、イコニウムで、デルベで、そして第二次伝道旅行でのピリピで、テサロニケで、ベレヤで、アテネで、そしてコリントで多くの異邦人が入信したが、ルカは単純に「信仰に入った」意のこのみを記している。彼らは、外的なしるしを伴う体験はなかったが、聖霊を受けて、喜びと平安で満たされていた。

(d) E事件以後信じた人々

E事件が起こった後、パウロはエペソを中心として小アジア全域に福音を語り、多くの人々が入信したと思われる(一九・二〇)。しかし、神の意図は、福音を更に大きな領域に及ぼすことにあった。パウロに対するエペソでの迫害によって、彼はエペソを離れ、マケドニア、ギリシヤと既に宣教された地域を再訪し、エルサレムに帰る。エルサレムで彼の敵対者が彼を殺害する陰謀をめぐらす、パウロ自身がその状況をローマ皇帝カイザルに訴えた事によって、摂理的にローマへの道が開かれるようになった。これは異邦人伝道の新たな大きな局面であった。彼はついにローマに達し、そこで宣教の業に従事するようになるのである(二八・三〇、三二)。パウロの宣教の姿勢は次の彼のことばによって要約される。

ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです(二〇・二二)

パウロの宣教は、ペテロや他の使徒達の宣教と同じく、悔い改めとイエス・キリストに対する信仰に強調があった。信じる者が聖霊を受けることは当然の結果と考えられていた。

以上、(a)、(b)、(c)、(d)の各項目での議論から二つの重要な結論が出てくる。

結論の第一は、使徒の働きの中に登場してくる全ての信者は「聖霊のバプテスマ」を受けていた。

結論の第二は、これらの信者には、J、S、C、Eの各事件で聖霊のバプテスマを受けた信者の体験した異言、

預言のしるしはなかった。

△聖霊体験の二重性の教理への反論▽

今まで進めてきた、「聖霊体験の二重性の解明」のセクションの全ての議論の中で、明らかになってきたのは、聖霊体験の二重性の教理は聖書の教えてはないということである。

以下、二重性の教理が支持できないことが明らかになってきた反論の各ポイントをあげ、それぞれに短い説明を加える。

反論一 史的イエスの歴史における出発点が決まっているように、史的聖霊の歴史における出発点がペンテコステの事件（J事件）であった。だから、この出発点が繰り返されることはない。セクション二の聖霊の来臨に関する未来言及で明らかにならないように、J事件はエルサレム（ポイント⑥）で起こらねばならなかった。既に指摘したように、この意味においてJ事件は、S、C、Eの各事件と本質的に違っていた。S、C、Eの各事件は、J事件の単なる繰り返しではなく、主に、未来言及ポイント⑦に関する成就なのである。

反論二 「聖霊のバプテスマ」という用語が指示するものは、「聖霊の注ぎを受ける」、「聖霊を受ける」、「聖霊が与えられる」等の用語が指示するものと同じであり、これらの用語は皆、同じ事象を現わす違った表現（パラフレイズ）である。これは、「聖霊のバプテスマ」を特異で独自の体験として、他の聖霊体験と区別して聖霊体験の二重性を主張する教理の根拠を崩すものである。

反論三 J事件における聖霊体験の二重性は歴史の必然であった。ポイント④にあるごとく、J事件はキリストの昇天と高挙の歴史的現象の後、起こる筈であった。であるから、キリストの弟子として信仰を持っていた（第一の聖霊体験―史的聖霊によらない遍在の第三位格の聖霊によった）にもかかわらず、ペンテコステのJ事件をも体験することになったのである。神の救済史の中でこの時点で生かされたキリストの弟子達の特種体験であったと言える。だから、この聖霊体験を普遍教理化すべきではない。S事件、E事件にも同種の二重性を見出すことができるが、これもポイント⑦の故に、宣教史上起こるべくして起きた特別な現象と言える。入信時から使徒ペテロがかかわっていたC事件では、J、S、E事件にみられる二重性はみられない。また、J、S、C、E事件以外で信仰に導かれた人々も、前述した研究結果では二重体験を持っていない。

反論四 「聖霊のバプテスマ」はポイント②によれば、キリストを信ずる全ての者が受けるべきものである。J、S、C、Eの各事件においても、全ての人が聖霊のバプテスマを受けた。初代キリスト教会で救われた他の全ての信者も聖霊のバプテスマを受けた。この事実は、パウロ書簡の主張と一致する（第一コリント一二・一二、ガラテヤ三・一四、エペソ一・一三を参照）。聖霊体験の二重性を主張する人々は、「聖霊のバプテスマ」は第二の体験として限定された人々に起こるという点で聖書の主張から離れている。ペンテコステの事件以後のクリスチャンが、「聖霊のバプテスマを受けよ」、「聖霊を受けよ」との勧めや命令ではなく、聖霊を受けている者として「聖霊に満たされなさい」（エペソ五・一八）との勧めを受けている事実も、聖霊体験の二重性を否定している。

反論五 J、S、C、Eの各事件に伴ったと思われる異言現象は、ポイント⑦の成就を確証さす神の超自然なしるしであり、いつでも繰り返されるしるしとして意図されていない。このしるしによって、史的聖霊の来臨が明らかになり、エルサレム、ユダヤ伝道、サマリヤ伝道、異邦人伝道の道が前述した如く開かれていった。であるから、「聖霊のバプテスマ」を受けたことの外的なしるしとして、異言を今のクリスチャンにも要求する聖霊体験二重論者は、必要なしるしを強要していることになる。異言や、預言は、聖書の賜物として、賜物を受けている者だけが建徳的なことのために扶助正しく用いるのが本来の在り方である(第一コリント一二、一四章参照)。

以上が「聖霊体験の二重性」を主張する人々に対する主な反論である²⁰⁾。

結 語

今日の聖霊論において、最も基本的な「聖霊のバプテスマ」に関して、聖書神学的アプローチによる検討をなした。その結果、聖霊体験の二重の教理は非聖書的であると結論した。

この結論は、決して伝統的な福音派の在り方が全面的に是認されたことを意味しない。むしろ、聖書的に正しい聖霊論に基づいて、日本の教会に主の大きいなる聖霊のリバイバルを拝するのための備えの一つとしたい。

この拙論によっても明らかになった重要な真理は、イエス・キリストの受肉とその地上生涯の後、明確な「聖霊の時代」が救済史上、到来しているという事実である。そして、この史的聖霊の役割は、この地球上の全ての民族、言語、文化の中で、わの御子イエス・キリストを信じて聖霊のバプテスマを受けキリストの証人となるはずの全ての人々が起こされていくことである。そして、このことのために、既に信じている者はすべて証人として聖霊と共に証ししていくのである。

この点において、キリストの体なる教会はこの聖霊の宣教の務めを第一とすべきである。キリストの再臨の時まで、「史的聖霊」の業がなされる時であるからである。このお方の聖書的な働きを全面的に受け入れて歩む姿勢が、福音的なクリスチャンに強く求められている時代ではないだろうか。

注

(1) 本稿は、一九九一年十一月十八日―二十日の間、京都堀川会館で開催された日本福音主義神学会第六回全国研究会議での発題「聖霊論：今日の課題」と、『このまのまの』一九九二年七月号八―十一頁に掲載された「聖霊論における福音派の今日の課題」の二つの拙論を基調として、いくらかの手を加えたものである。

(2) 福音派の中の代表的な組織神学者の聖霊論の扱い方を見てみると、
①ハイス・ベルホフ (L. Berkhof, Systematic Theology. (London: The Banner of Truth Trust, 1966)) は、「聖霊論に関して三位一体論の中で第三位格としての聖霊を扱っており、聖霊は神格を持っており、第一位格と第二位格の神より発生しているとしている。また救極論の中でも聖霊を扱っており、第一位格の救いの完成の業に基づき、個々の信者に具体的な恵みの業をもたらすのが聖霊によるとしている。

②ヘンリー・シーセン「組織神学」(聖書図書刊行会、一九六一年)は、三位一体論の中で聖霊の神格について論じている以外は、聖霊についての言及はあっても、まともな聖霊論というべきものはどこにも展開されていない。

③H・ジェーロブズ「キリスト教教義学」(聖文舎、一九七〇年)は、三位一体論の中で聖霊について議論し、救極論を二部に分けて展開し、第一部は、「神のみ子の受肉と、代償的行為」(二一九頁)とし、第二部を「代償的職位による働きの結果を適用して、く業」(二一九頁)として聖霊の特別のみ業としている。そしてこの聖霊の特別のみ業として、信仰、義認、召し、照明、新生、神秘的合一、聖化をあげている。

④W・T・パーカイザー (W.T. Purkiser (ed.), Exploring Our Christian Faith (Kansas City, Missouri: Beacon Hill Press of Kansas city, 1968)) は、この書の九章全体を聖霊論を扱う章として、史的観点から聖霊論を展開している。旧約聖書における聖

霊と新約聖書における聖霊の二つの大きな時代区分を設定し、それぞれの中で聖霊を論じている。更に同じ章で、聖霊と人間イエス、また三位一体の項目も取り扱っている。

- (3) R・H・カルベッパ「カリスマ運動を考ふる」(ホルタン社、一九七八)を参照せよ。この中には、ペンテコステ派の歴史、その影響、また教理が詳述されている。カルベッパは南部バプテスト出身者で、西南学院大学神学部教授の立場で執筆しており、客観的で公平な分析がなされている。日本人によるカリスマ運動とその神学の手引として、手束正昭『キリスト教の第二の波—カリスマ運動とは何か—』(キリスト新聞社、一九八七)がわかり易い。
- (4) ジョン・ウインバーの著作としてはケビン・スプリングラーとの共著として、
John Wimber and Kevin Springer, *Power Evangelism* (San Francisco: Harper & Row Publishers, 1986).
John Wimber and Kevin Springer, *Power Healing* (San Francisco: Harper & Row Publishers, 1987) がある。
Kevin Springer(ed.), *Power Encounters* (San Francisco: Harper & Row Publishers, 1989).
Don Williams, *Signs Wonders and the Kingdom of God* (Ann Arbor, Michigan: Servant Publications, 1989).
Charles H. Kraft, *Christianity with Power* (Ann Arbor, Michigan: Servant Publications, 1989) 等がある。
- (5) 『ローザンヌからマニラまで—マニラ宣言全文訳及びその解説付—』(関西ミッション・リサーチ・センター、日本福音同盟 一九九〇)四二頁の「ローザンヌ誓約」第四項「聖霊の力」から引用。
- (6) 前掲書 九頁「福音宣教のための担い手であられる神」より引用。
- (7) 牧田吉和氏は、「改革派教義学と聖霊論—改革派神学の新しい可能性を求めて—」『改革派神学』第一九号(一九八八年)の中の一考察として、H・バーフィンの聖霊論を取り上げ、「改革派神学の新しい地平を求めするために、先ず確立すべきことは、バーフィンクが一世紀前に自覚していた救済史における時の認識、即ち「聖霊の時代」の認識の確立である。」(四四頁)と指摘している。
- (8) 宇田進氏は「史的イエスの新しい探究」『新キリスト教辞典』(いのちのことば社、一九九一年)の中で、史的イエスの研究が直面してきた諸問題に触れ、純粋なイエス伝の確立は不可能としても、初代教会が、イエスという人間をどのように理解してケリユグマを形成するようになったかを探求する実存史と実存主義的人間論の探求は可能としている。

- (9) 日本福音主義神学会第六回全国研究会議の準備委員会は、発題内容を、「総論」、「イエスと聖霊」、「ペンテコステと聖霊—使徒の働きの観る聖霊」、「聖霊と宣教」、「聖霊の賜物」と決定した。この発題内容の主旨は、福音書、使徒の働き、書簡類の中に啓示されている聖霊の聖書神学的、史的研究の提示であり、福音派の聖霊論の一致への布石であった。
- (10) これら四つの聖句の中でマタイとルカは、聖霊と火によるバプテスマとして「火」という語を加えている。釈義家の間で種々の意見が「火」の意味に関して出ているが、結論的に言えることは、「火」はあくまで周辺の意味を提示しているにすぎなくて中核的な意味は、四つの言及に共通している「聖霊によるバプテスマ」であるということである。
- (11) W.T.Parkiser(ed.), *Exploring Our Christian Faith* pp.184-188 によると、旧約聖書全体で聖霊(רוח)に対する言及は八十六回あり、それらの言及は、①この世界における聖霊の一般的な働き ②選民の間における贖罪的な働き ③メシヤと聖霊の時代のことを預言したもの、の三つの分野においてなされている。ポイント③が本論文における研究対象となる。
- (12) 村上久「イエスと聖霊」日本福音主義神学会第六回全国研究会議レジメ集(一九九二年)を参照せよ。
- (13) 日本の教派としては、ペンテコステ諸派、アッセンブリズ・オブ・ゴッド教団、そして諸教派の中でカリスマ運動の神学に同意している諸師、諸兄弟等がこの立場を取る。日本キリスト教団内にも、例えば前掲の手束正昭『キリスト教の第三の波—カリスマ運動とは何か—』の如く、この神学的立場に移っている諸師が起きている。カトリック内でも同じ動きがあることは周知の事実である。
- (14) 伝統的には、日本のキリスト教会のはとんどがこちらの立場に立ってきえてきた。一九六〇年以後、カリスマ運動の世界的な拡大の中で、聖霊論の再検討が迫られている。筆者は、この立場を堅持すべきだと信じているが、より包括的な聖書神学的研究に基づく聖霊論の神学的修正が必要であると思う。
- (15) ギリシヤ語本文に基づいての聖書神学的研究がなされたが、それらの細かい議論は明らかにこの論文の紙数を越えることになるので、ここでは、研究結果を要約していくことが主になる。
- (16) ギリシヤ語本文では、町を意味する *πόλις* に定冠詞の *ἡ* が付されているかどうかで
①定冠詞がない場合は「サマリヤ地方の一つの町」となり
②定冠詞がある場合は「サマリヤ地方の首都」或いは「サマリヤという首都」の意となる。
- (17) 使徒の働き一章三節によるとペテロは、「割礼のない人々のところに行つて」と非難されているので、コルネリオも彼の全家族、

親族も改宗者ではなかったと思われる。

(18) F・F・ブルース『使徒行伝』（聖書図書刊行会、一九六二年）、また、榊原康夫『使徒の働き』（いのちのことば社）によると、両者は使徒一九・一の「弟子」をイエス・キリストの弟子と理解しているが、彼らは、他のクリスチャンとは違ってバプテスマのヨハネ的な信仰生活を送っていたとされている。

(19) 使徒の働き、その他の新約の書物の研究によって、筆者は、聖霊の満たしは、聖霊を受けていることが前提となっている事を見い出している。

(20) 筆者があげたこれらの反論のかなりの部分は別の形で、次の著作の中にも読み取ることができるものである。
ビリー・グラハム『聖霊』（いのちのことば社、一九七九年）
ジョン・ストット『今日における聖霊の働き』（いのちのことば社、一九八五年）

（福音聖書神学校校長、メノナイト・プレザレン・石橋教会主任牧師）